

誰かのメリークリスマス Someone's Merry Christmas

藤田雅史

午後九時。窓の外を落ちているのは雪ではなく雨だった。

会社のビルから見下ろす漆黒の大通りには、ビルのネオンや街灯、車のライトが、眼鏡を外したときに見る遠くの光のように、揺らめきながらにじんでいる。

オフィスで残業している女性社員は私が最後だった。

いつもなら営業の子が二、三人居残って、スナック菓子を囓りながら怖い顔でパソコンに向かっていているのだけれど、さすがに今夜はしんとしている。よくよく見渡せば、フロアに残っているのは独身の中年男ばかりだった。

おつかれさま、と誰に言うでもなく言い残して、私はロッカーからコートをつかみ、そつと廊下に出た。オフィスのなかは空調が無駄にきいて汗ばむほどだったから、廊下の肌寒さが心地よい。けれど下りてきたエレベーターに乗りこむと、あまりの寒さに膝が震えた。ビル全体の節電対策として暖房の切られた鉄の箱は業務用の巨大な冷凍庫のようで、今がまさに年の瀬であることを思い知らされた。

先に乗っていた別の部署の見知らぬ若い男が、今夜まじ寒いっすね、と肩をすくませた。ほんと、残業なんかするんじゃないかかった。適当に言葉を返しながらコートに袖を通し、首から頬まで覆うようにしてマフラーを巻く。やわらかなカシミアに埋もれた唇から息を吐くと、そのぬくもりが、まだ会社のなかだというのに眠気を誘った。

地上階で重いドアが開くと、エントランスの片隅に飾られたクリスマスツリーが目に入った。ブルーのLEDイルミネーション

をまとったツリーは、まるで待ち合わせをすっぱかされた若者が
茫洋と突っ立っているように、青ざめて見える。男が開ボタンを
押したので、私は小さく頭を下げて、ども、と言って先に出た。

おもてに出ると雨はぽつぽつといった感じで、思ったほど強く
は降っていないかった。

一瞬迷って通勤用のトートバッグを開きかけたが、ケースから
折り畳み傘を取り出すのが面倒になってそのまま歩き出す。

去年のこの日なら、この程度の雨でも私は傘を差していたに違
いない。髪や化粧が乱れるのを気にしただろうし、なによりバッ
グに忍ばせたプレゼントを濡らしたくなかった。でも今年はも
う、そんなことを気にする必要がない。

「あー、ホワイトクリスマスにならなかったね」

会社の角を曲がり駅の方向へ歩いて行くと、コンビニから出
てきた若いカップルとすれ違った。会話の断片が勝手に耳に入っ
てくる。

「予報じゃ雪だったのになー」

「ねー」

タクシーを探すような素振りでもちらりと目をやると、ふたりは
近くの私立高校の制服にマフラーを合わせただけの軽装で、駅と
は反対方向に歩いて行く。傘は差さず、手を握り合い、予備校の
テキストらしきものが入った透明のケースをふたりとも反対の手
にぶら下げている。女の子の少し垢抜けない髪型と、安っぽいチ
ェックのマフラー、学校指定のバッグを見て私は、きつと隣にい
る男の子は、彼女にとっておそらく人生はじめての彼氏だろう、
と直感した。今夜は予備校で授業があつて、そのあと友達と一緒
に自習室で勉強。そんな口実で、イブの夜のふたりきりの時間を
作り合つたのではないか。きつと高校生活最後のクリスマス。

雪が降らずに残念だったね。私は胸の内できめてみる。

でもだいたい冷え込んでいるから、これから雨が雪に変わるこ
とがあるかもよ。山下達郎の歌みたい。さよならするときには雪が

舞い降りてたりしたら、きつと忘れられない思い出になるね。そうしたらもうキスするしかないよね。白い息を吐きながらさ。

そうか、ああいう子たちをリア充っていうのか。

最近よく耳にする若い子たちの言葉の意味を、私は自分があのカップルの三倍近い年齢であることを自覚しながらようやく理解した。なるほどなるほど。イブの夜に恋人と手をつないで街を歩くような子たち。あれはわかりやすいリア充だわ。

歩きながらも一度振り向くと、ふたりの姿はもうなかった。

私はふと思う。では、今夜残業せずに定時きっかりに上がっていった会社の若い女の子たちのうち、いったい何人がそのリア充というカテゴリーに属するのだろうか。

私の職場であるネット通販事業部は、他の部署に比べて女性の比率がやたらと高く、テレオペルームにいる派遣スタッフも含めるとフロアの約半分は二十代から三十代前半までの女の子たちで占められている。

結婚している子。彼氏のいる子。彼氏はいないけれど友達との約束がある子。本当は約束なんてないけれど約束のあるような素振りで帰った子。なかには、男の目に晒される予定などないのに派手な下着を着けている子もいたかもしれない。その子は今、どこかで男から声をかけられるのを待っている。逆にクリスマスなんて関係ないと居直って、こたつでテレビの特番を眺めながら馬鹿笑いをしている子もいるだろう。もう恋とか愛とかではなく、幼い子どもの喜ぶ顔にクリスマスの幸せを感じている子もいるに違いない。

彼女たちの顔を順番にひとりずつ思い浮かべながら、勝手にそれぞれを想像してみると、若い子たちならではの見栄や欲望や高慢さや卑屈さが、メイクで上手に作り上げられた笑顔の向こうに透けて見えてやけにおかしい。

背を丸め、あたたかいカシミアで顔を隠しながらくつくつ笑いを囁みしめ歩いていると、さほど寒さも感じずに済んで、あつと

いうまに駅に着いた。

クリスマスイブは、リア充のリトマス試験紙だ。

人の心の内はさまざまだけれど、今夜だけは、世の中の人たちが幸せと不幸せのどちらかに必ずチーム分けされる気がする。それぞれに、イブの夜、という踏み絵を踏んで幸福の量をはかっている。

でも、残業上がりのイブの夜に電車を待ちながらそんなことを考える私は、やはり今年のクリスマスに関しては、明らかに不幸せチームの所属だ。

今年の春、私は恋人を亡くした。

十年間本気で付き合った、年下の恋人だった。

恋人はある日何の前触れもなく、突然自宅で倒れた。同居していた母親が救急車を呼び、すぐに病院に搬送されたものの、一週間ほど生死の境をさまよい、そのまま意識を取り戻すことなくこの世を去った。

私が最後に会ったのは、恋人が倒れる十日ほど前だった。

恋人は仕事のことですいぶんと悩んでいた。私の部屋で夕飯と一緒に食べたのだけれど、恋人は珍しく、私の手料理を半分以上も残した。好物のはずの生クリームがたっぷりのったプリンも、胸焼けしそうだと言って口をつけなかった。

「ごめんね、食べきれなくて」

「体調悪いの？」

「うーん、いろいろあって」

キスはしたけれど、セックスはしなかった。恋人はニュースの後のバラエティ番組の途中で、明日も早いから終電には乗らなきゃ、と言って帰っていった。

恋人を元気づけようと、私はそれから頻繁にメールを送った。でも一度も返信がなかった。それもまた普通の恋人からすると、めったにないことだった。私は妙に気分がそわそわして落ち着か

ない日を幾日か過ごした。

電話をかけても出ないので、いよいよおかしいと思った私は、恋人が両親と同居している家の固定電話に連絡してみた。電話口には恋人の母親が出て、そのときようやく、恋人が脳梗塞で倒れて入院していると知らされた。亡くなったのは、その二日後だった。

私は年の離れた親しい友人（前の職場で仕事上の付き合いがあり、プライベートでも仲良くさせていただいた者）として恋人の葬儀に参列した。遺体と対面する機会是与えられなかった。棺の小窓は最後まで閉じられていた。親族以外で参列しているのは私だけで、それもなんだか奇妙だった。死因については、誰も何も語らなかった。帰り際、受付のところで恋人の親戚らしき男の人が、恋人の会社の上司らしき男の人に香典を押し戻している場面を見た。

帰り際に挨拶をすると、恋人の母親は、あの子の歳で脳梗塞なんて信じられないわ、と私に言った。なんだか押しつけるような言い方だった。信じられない。そう、信じられない。

私は、恋人の母親のその説明が信じられない。本当は、私の大切な恋人は、自ら選んでその道に足を踏み出したのではないか。私はそう思っている。恋人は転職をしてまだ数ヶ月で、新しい職場に馴染めないでいた。明らかに様子がおかしかった。疲れ切っていた。追い詰められていた。

「今度、お仏壇に手を合わせに伺ってもいいですか？」

ええ、と小さな返事がかえってきたけれど、その表情は迷惑そうだった。

マンションの部屋に帰ると、ドアノブが凍ったように冷くて思わず手を引つ込めた。冬だから当たり前なのだけれど、ことさら冷たく感じるのは、やはり今日がクリスマススイブだからだろうか。

五年前にローンを組んで買ったこのマンションの部屋は、いづれ恋人と一緒に住む予定だった。

「ねえ、来年のクリスマスはプレゼント何欲しい？」

三六五日前のイブの夜のやりとりを思い出す。

私たちは暖房のよく効いた寝室のベッドの上において、ふたりとも素っ裸だった。恋人はクリスマスが好きだった。

「あたしそろそろクルマ買い替えたい」

「じゃあプレゼントするわ」

「ホントに？」

「中古車情報誌」

「あはは」

「それよりさ、私思ってたんだけど、来年、大きいツリー買わない？アメリカ映画みたいなのでつかいやつ」

「いいね、買っちゃおうか。飾り付けとか楽しそう」

「オーナメントもいっぱい買ってキラキラにして」

「あたし、手作りしたい」

「えー、ちゃんとできるの？」

「ネットで調べみるね」

四十と五十の裸の女がふたりでそんな無邪気な会話を交わしながら愛し合っていた。今思えば、あまりにも現実離れしていて、まるで夢のようだ。

そう、私の恋人は女性だ。いくら長く一緒にいても、いくら愛し合っている、法律上、結婚することのできない関係が続いていた（地域によっては同性の「結婚に相当する関係」が認められるところもあるけれど、あいにく私たちの暮らすこの町はそのまま進歩的ではない）。むしろ結婚できないからこそ、その関係はいつまでも恋でありつづけられた。だから私たちは、中年女でありながら、まるで十九、二十歳の女の子のように遠くにたくさん夢を見ていた。

五十を過ぎても還暦になっても、この部屋で毎年この時期にな

れば天井に届きそうなほど大きなクリスマスツリーを見上げて、ふたりで生きていくはずだった。仕事を頑張つて計画的にお金を貯めて、退職したら、お互いの行きたいところを決めて年に二回の海外旅行をするつもりだった。

男を愛そうとしたこともあった。田舎の両親を心配させたくないという気持ちもあった。でも、いくら努力をしても、愛せないものは愛せない。触れたくないものには触れたくないし、触れたいものには触れていたい。

若いうちは、そんな自分が不幸だと思っていた。私の身体と精神には生まれつきの欠陥があつて、だからノーマルではない、人生を謳歌する立場にない人間だと決めつけていた。

そのぶん、私はひとりで生きていくために仕事に打ち込んだ。男社会のなかで、自分の居場所を見つけることに精一杯取り組んだ。当時はまだリア充という言葉はなかったけれど、マイノリティという言葉はあつた。差別されることに抵抗はない。でも、好奇の目でじろじろ見られるのはたまらなかつた。同性愛だという事実は、会社にも友人たちにも家族にもずっと隠している。

四十歳になったとき、嫁に行き遅れまして情けのうごきまです、という演技で誤魔化しながら、もうここまできたら私は生涯独身を通すつもりです、と両親に宣言した。愛娘の幸せと子孫繁栄をあきらめざるをえない両親の落ち込みように、さすがに少し胸が痛んだが、でも私はそのとき何かをふっきました。私の人生は私のものだ、ということを確認した。そして、これでこの先、もう誰の期待も裏切らなくて済むと安心した。目の前にまつすぐな道が開けた気がした。

ちょうどそんな頃に出会ったのが、彼女だった。

十年前だから、彼女はまだ三十歳になったばかりだった。会社の取引先の営業担当のひとりだった。ひとつ大きな契約がまとまりかけていて、親睦を深めるために両社からそれぞれの上司を含め三人ずつが参加する食事会を催した。

仕事の話をしなから少しずつ打ち解け、二次会でいよいよ酒に飲まれて下世話な話に意気投合した男たちは、店を出たあと風俗街に流れた。

私はさすがにそこにはついて行く気になれず、帰りのタクシーをつかまえようとしていたところで、彼女から声をかけられた。ふたりに二次会しませんか。いいわね、しましょうか。いいお店知ってるんです。じゃあそこにしましょう。

「佐久間さんって、私と一緒にすよね」

雑居ビルの地下のダイニングバーの片隅。ピンスポットライトに照らされた薄暗いカウンターに並んで、バーテンダーに一杯目の酒をそれぞれ注文した直後、彼女は私に肩を寄せ、耳元で小さく囁いた。

「え」

「一緒にすよね」

彼女の茶色い瞳には、他人の秘密を暴くいやらしさと、好きな人に告白するときの恥じらいが、同時に光っていた。

「一緒に、すよね」

彼女は念を押すように言って、カウンターの下でそっと私の手を握った。私はその手を握り返した。

「そうね」

「わかってました」

「そう」

「もう、つままない顔しないでくださいよ」

「え、私つままなくなんかないけど」

「佐久間さん、打合せのときいつも死んだ人みたいに見える。さつきもそうです。みんなと話しながらみんなと同じところで笑ってるのに、全然楽しそうに見えなかったです」

「そうかな」

「うん。私、こんなに佐久間さんに会うのが毎回楽しみで楽しみでしかたないのって、ずっと悔しく思っていました」

「まあ仕事だし。楽しいって感情はなかったな」

「今もですか？」

そう言っただけ私の目を見つめる彼女の瞳は、とても挑戦的で、愛らしかった。

私たちはその夜から付き合いはじめた。いろんな意味で驚くほど相性がぴったりだった。それまでずっと、取引先の人、としてしか認識していなかったことが不思議に思えるほどだった。

やがて、私たちはふたりで人生を決めることにした。

それは婚約みただった。永遠に結婚しない、そんな婚約。

彼女のいない今年のイブは、だから、何もない。

ケーキもチキンもワインも、もちろん大きなクリスマスツリーも、新車のプレゼントも。

私はいつもの平日と同じように、さっさと作り置きのおかずをあたたためて、粉末スープをお湯にとかし、夕飯をすませた。風呂に入り、コンタクトを外して眼鏡をかけ、パジャマに着替え、テレビのニュースと録画したドラマをぼんやり見ながら発泡酒を一缶空けると、のそのそとベッドに上がって毛布にくるまった。

読みかけの文庫本の続きを読む。最近ハマっている松本清張。でもいくらページをめくっても、文章がちつとも頭に入らない。前のページに戻って読み直しても、物語が進まないどころか、登場人物の名前さえおぼえられない。

私は本を閉じて、じっと天井を見た。部屋はエアコンが効いて暖かいのに、白い壁紙が寒々しい。まるで雪の中にとじこめられているようだ。

何気なく充電コードにつながれたスマートフォンに手を伸ばし、ネットで適当なページを見る。アマゾンで買った新しい体重計はいつ届くのか。まだ読んでいない松本清張の短編集のレビューと星の数。明日の最高気温は何℃か。ヤフーニュースのエンタメの記事に興味をそそるものはあるか。あの芸能人の不倫問題は

そういえばどうなったのか。そしてネットに飽きた私は、ブラウザを閉じて、スマホに保存されている写真アプリを起動させた。指先で少しスクロールするだけで、彼女の顔がたくさん出てくる。それはつまり、彼女という被写体が消えてしまっただけから、私はほとんど何も撮影していないということだ。

去年のクリスマスの写真に、彼女が買ってきた有名店のケーキが写っている。皿と食べ物で散らかったテーブル。ワインは気に入りの重厚なものを選んで私がネットで取り寄せた。チキンはふたりでオーブンで焼いた。総菜はデパートの地下で買いそろえた。イブの夜くらい、ダイエットを気にせずに好きなものを好きなだけ食べようと言い合って、許し合って、たくさん買い込んで結局たくさん余らせた。

彼女は私にマフラーをプレゼントしてくれた。ベージュの無地の厚手のカシミヤ。私を買ったばかりのコートに似合うマフラーを探していたら、彼女が選んでくれたのだ。

私は彼女に腕時計をプレゼントした。ちょうど彼女が転職を決めたタイミングだったから、初対面の人にも雰囲気の良い上品な感じに見えるよう、カルティエのシンプルなものにした。広告代理店の営業という仕事はたくさん、いろんな立場の人に会うだろうから、彼女に安物を身につけさせたくなかった。

あんなものプレゼントしなければよかったかもしれない。頑張っただけで、なんて言わなければよかったかもしれない。職場が変わったから、彼女はノルマに追われ、憔悴した顔を見せることが多くなつた。残業しすぎなんじゃない？ と心配して声をかけても、広告業界はこんなの普通だから、と彼女は強がっていた。ちゃんと食べてんの？ 食べてるよ。何食べてんの？ いろいろだよ。

「ちよつともう、心配すんのやめて。これじゃまるで私たち、歳の離れたお姉ちゃんと妹みたいだよ」

「だって」

「まだ一年目でしかも中途採用だからさ、いろいろプレッシャ

ーとかもあるわけ。しかももうすぐ四十だからね。けっこう私なりに勝負かけてるわけ」

「でも無理しないようにね」

「だからちよつとくらい無理しなきゃいけないんだって。やりたいことやってるんだもん。平気だよ」

ねえ、どうして死んじゃったの？

平気って言ったのに。やりたいことやってるって喜んでたぐせに。

一年前の彼女の笑顔に、私はたずねる。

ひどいよ。なんでひとりで先にいなくなっちゃうの？ 仕事、そんなに大変だったの？ それとも、私と一緒にいることがよくなかった？ こんな身体に生まれたせい？ それとも、実家のお父さんやお母さんと何かあったの？ みんな相談してほしかったよ。ひとりで抱え込まないでよ。私は、みんなみんな、どんなことでも許してあげたよ。大丈夫だよって、言ってあげたよ。孤独死するのはつらいから、ずっと一緒にいよう、おばあちゃんになってもふたりでいようって約束したのに。なのに、なんで私を置いて先にいっちゃうの？

私は指を動かして、それをメールに書いた。

書き終わるとスマートフォンを放って、明かりを消した。そして布団のなかで、彼女のぬくもりと柔らかさを思い出しながら、さびしさに震えて眠った。

夜中に夢を見た。それもとても幸せな夢を。

何の夢だったかは思い出せない。

遠くに着信音が聞こえる、出なくちゃ、出なくちゃ、と思つて目を覚ますと、窓の外がうつすら明るかった。

スマートフォンを探すと、床でメールの着信を知らせる青いうら

ンプを点滅させていた。前の晩に会社のビルで見たクリスマスツリーのLEDの点滅を思い出しながら、私はそれを拾い上げ、眼鏡をかけた。

最初、会社からのメールかと思った。うっかり寝坊して遅刻して、心配されたかと。でも時刻を見るとまだ六時を過ぎたところだった。こんな朝早くに誰だろう。そう思っただけボタンを押し、ホーム画面からメールのアプリを立ち上げる。

知らないアドレスからのメールだった。こんな朝早くメールを寄越すのは実家の母か、それか迷惑メールか。あるいは翌月の引き落としの請求額を知らせるスマホキャリアからのメールか。そんな見当をつけながら、なんとなく開く。

画面には淋しげな空白が広がっていた。そこには一行だけ、

〈メリークリスマス〉

と書かれていた。件名もなく、絵文字もなく、ただ八文字のカタカナが並んでいた。句読点もない。

見知らぬ誰かが、別の誰かに送ったメッセージが、きつと間違っただけのところに迷い込んだのだろう。

でもそのフレーズをもう一度見返した私は、今度はその言葉を、彼女の声で聞いていた。

「メリークリスマス」

彼女が私の名前を呼んだ。

私はさつき見ていた夢を思い出した。夢の感触を思い出した。それは彼女の夢だった。笑顔だった。楽しかった。

クリスマスの夢だったような気もするが、夏の海だったような気も、かつてふたりで行った遠くの町の桜並木だったような気もする。どこでもよかった。夢に場所なんて関係ない。それが天国でも地獄でも、夢のなかならどこも一緒だ。往来は自由だ。

現実ではもう会えないから、わざわざクリスマスの夜に、夢のなかに会いに来てくれたんだね。

思い込みなのはわかってる。でもそう信じることでしか、私は

今、幸せにはなれない。そう信じることで、一瞬だけ、私は確かに幸せを取り戻せる。

私は返信画面に切り替えて、入力する。

〈あなたにも、メリークリスマス〉

送信ボタンを押すと、ひゅう、と音を鳴らしてそれは見知らぬ誰かへと送られた。その誰かのスマホが今、鳴って、気づいた誰かがそれを開く。読む。そして、何かを思う。気持ち悪いと感じるかもしれない。でも、それもどうでもよかった。

私はベッドから起き上がり、寒い冬の一日をはじめめる。

カーテンを開き、窓から町を見下ろす。道を人が歩いている。

ゴミ捨て場でカラスが鳴いている。信号で車が止まり、走り出す。遠くに電車の音がする。空はよく晴れている。

朝食のパンとスープを買いにコンビニまで散歩して、ついでに雑誌でも何か買おうかな、なんて思ったら、恋人の顔が、今度は冬の空に浮かんだ。そうだ、中古車情報誌。プレゼントしなきゃ。彼女が笑う。こんなものいらないよ、と私の腕を小突く。

私は窓辺にうずくまり、永遠のさびしさに震えた。



※この作品はフィクションであり、実在の人物、団体等とはいっさい関係ありません。
※本作品に関するすべての権利は著者本人に帰属します。また、無断での複製・改変・放送・上演等は固くお断りいたします。